

「深い淵の底から」

詩編 130編1～2節

日本ナザレン教団 小山キリスト教会牧師・本学講師 石田 学

きょうの聖書、旧約聖書の詩編130篇は、ラテン語聖書の最初の単語にちなんで、「デ・プロフンデイス」というラテン語の呼び名でも知られています。英語の profound という単語をご存知の方は、似ていると感じるでしょう。たぶん英語が、ラテン語のプロフドウスから来たのでしょうか。デ・プロフンデイスというのは、「深い淵の底から」という意味です。淵というのは、底が分からないほど深い穴、あるいは谷の底深くという意味です。この詩編を歌った詩人は、深い淵の底に落ち込んでいるのです。それは文字通りの穴に落ち込んでいるというよりも、詩人の心が実感している、魂の姿の描写です。

魂が底なしの深い穴に落ち込んで、そこから出ることができない。わたしはこれまで、悲しいことや悔しいこと、怒りを覚えることは、いろいろ体験してきました。夜も眠ることができない思いをしたこともあります。でも、深い淵の底に落ち込むほどの絶望は、正直なところ、まだ体験したことがありません。ですから、想像するだけです。5年半前の、あの3.11地震によって引き起こされた津波は、皆さんも覚えていることでしょう。テレビに、いまでも忘れられない映像が映し出されました。津波に流される水の中で、少女が手を差し伸べて流されてゆきます。ビルの屋上から大勢の人が見っていますが、助ける術はありません。少女の目に宿る、恐怖と絶望が今も脳裏に焼き付いています。そのことを思い出すたびに、深い淵の底から、という言葉がわたしの心に浮かびます。

わたし自身の体験ではないのですが、わたしの父は第二次世界大戦の東京大空襲で、母親と5人の弟、妹たちが、燃やし尽くす爆弾によって焼き殺されるのを目の当たりにしました。父は、具体的なことをとうとう、最後まで話しませんでした。その時の父の魂は、深い淵の底にあり、地の底で叫んでいたと思います。なぜ、そんな不幸、そんな苦難、そんな災いが起きるのか。どうして、自分や自分の愛する人が犠牲にならねばならないのか。誰に尋ねても、いくら問うても、どんなに答えを祈り求めても、答えは来ません。答えはたぶん、ないからです。神を信じていれば、苦難や不幸は起きないのでしょうか。いいえ、神を信じているかどうかは、苦難の体験とは無関係です。

きょう読んでいただいた詩編の詩人は、神を信じている敬虔な信仰者です。1節は「都に上る歌」という、この詩の表題で始まります。「都に上る歌」というのは、ヘブライ人の都エルサレムとその神殿への巡礼者の歌という意味です。詩人は、神殿を目指して巡礼の旅をしてきたのでしょうか。ところが、神を信じているはずの詩人が、自分の境遇を「深い淵の底」と表現します。苦難を負っているのです。それも、ちょっとした痛みや悲しみではありません。「深い淵の底」に落ち込んでしまったと感じるほどの苦難です。その、深い淵の底から、しかし、詩人は神に呼びかけるのです。

時としてわたしたち人間は、耐え難いほどの苦難に会うと、神に「どうして」と叫び、神に怒り、苦難を防いでくれない神を恨み、「神など信じるものか」と神をののしり、「神などいないのだ」という答えに行き着いてしまいます。しかし、深い淵の底に落とされた詩人は、その淵の真つ暗闇の底で、遙か彼方にかすかに見える光を見上げて、光である神に向かって呼びかけるのです。

深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。

主よ、この声を聞き取ってください。
嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください。

真っ暗な深い淵の底に落とされるとき、わたしたちが、穴の底に広がる暗闇だけに目を向け、闇に身も心も閉ざされてしまうとしたら、わたしたちは恐怖、絶望、悲嘆、そして虚無に飲み込まれるでしょう。それは想像するだけでも、恐ろしいことです。そんな目に会わないですませたいと切に願います。でも、苦難に会うか会わないかを、わたしたちは選べません。苦難は何の理由も根拠もなく、無差別に、理不尽に襲い来るからです。深い淵の底に落とされないようにすることができないのだとしたら、いったい、わたしたちには何ができるのでしょうか。苦難の時にただ一つできること、そして苦難の中でのただ一つの望み、抛り所を、詩編の詩人は、深い淵の底でしたのでした。上を見上げて、神に呼びかけ、祈り、自らを神に委ねたのです。

この詩人の歌は、わたしたちに、神を信じるということの意味を教えてください。神を信じるとは、神がいると信じることは違います。神を信じるとは、安全や成功や健康が保証されることでもありません。深い淵の底にあるような、絶望と闇が取り囲む、その中でさえ、天にわたしの声を聞き、耳を傾けてくださる神がおられる、そう信じることです。

神を信じる人は、たとえ絶望的であっても、絶望しません。たとえ四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、自分の命がもう続かないと悟っても、悲しむだけで死にません。たとえ死が迫るとしても、最後まで神に望みをおいて生きるのです。苦難の意味を説明する力も知恵も、わたしにはありません。でも、深い淵の底でも、神に望みをおき続けることができる。それがどんなに力強いことかを、わたしは幾人もの人に教えられました。ですから、最後に、それらの中の一人の人の話をします。その女性は、三十代の終わりでした。大学時代に一人の青年と熱烈な恋愛をして、卒業と同時に結婚しました。三人の子どもに恵まれて、本人はもちろん、周囲がみても幸せの模範のような家族でした。ある日、腹部に違和感を感じ、急激にひどくなりました。病院で検査をして、悪性の腫瘍であることがわかりました。手術をしましたが、取り切れませんでした。半年ほどして再発し、恐ろしいほどの早さで容態が悪くなり、抗がん剤治療、放射線治療どれ一つ、効果がありませんでした。医師の説明によると、極めてまれなタイプの腫瘍で、世界で数十例、日本では三例しかなく、治療の方法はないとのことでした。「どうしてわたしが」と問われても、わたしには答えはありません。共に嘆き、共に祈り、神の手が触れて奇跡を起こしてくださるよう、祈り続けました。きっと、彼女の魂の内に、嘆き、怒り、悲しみは深く、深い淵の底に落とされたと感じていたことでしょう。でも、その女性はわたしが不思議に思うほど、明るく、無理をして教会に来ると、みんなと共に笑い、楽しみ、やがて病院から出ることができなくなり、医師がもう長くはないと告げると、夫を呼んで「あなたがしっかりして子どもたちを育ててください」と頼み、子どもたちに最後まで愛情を注ぎました。もう数日の命と知り、まだかろうじて意識のあるとき、最後の聖餐式、あのパンと杯の儀式を、文字通り最後の晩餐として、病院でおこないました。ものを口にする力はありませんでしたから、パンを米粒くらいにちぎって口に入れ、ぶどうジュースは、わたしの小指に浸して、彼女の口に含ませました。まるで赤ん坊がおかあさんのお乳に吸い付くように、強くわたしの小指を吸い、今でもその感触が指の先に残っています。それから間もなくして、その女性は天の神の元に召されました。

残された夫は、生涯年寄りになるまで共に生きようと望んでいました。なぜ、どうして、と神に問うても、答えは来ません。ある日、ついに夫はわたしにこう告げました。どうして自分の妻がこんなことになり、なぜ自分と子どもたちがこんなに苦しまねばならないのか、神に怒りすら感じる。だが、わたしは妻と同

じところ、同じ天の神の国に行きたいから、神を信じ続ける。

「深い淵の底から」神に祈れ。聖書の詩人は、今もわたしたちにそう語りかけていると思うのです。

2016年10月21日 聖学院大学 全学礼拝(シリーズ礼拝)